

---

---

ジョルジュ・スーラ作《ポーズする女たち》に関する一考察  
—モデルを中心に—

---

---

《ポーズする女たち》(1886-1888年、メリオン、バーンズ財団)はジョルジュ・スーラ(Georges Seurat, 1859-1891)の三つ目の大作であり、1888年のアンデパンダン展で展示された。本作の中心に描かれているのはアトリエの一角でポーズをとる三人の裸婦であり、左の壁にはスーラの二つ目の大作である《グランド・ジャット島の日曜日の午後》(1884-1886年、シカゴ美術研究所)が画中画として登場している。

この作品の解釈について、先行研究は主にモデルのポーズの西洋の伝統的な図像からの影響や、モデルの女性たちの社会的立場を画中画と対比させることに主眼を置いている。しかし議論が十分に行われているとは言い難く、またモデルと画中画にばかり論点が集中し、その他の絵の構成要素についての考察はおろそかにされている。

研究者はモデルの源泉やその特徴を改めて捉えなおすとともに、習作や絵画に描かれた服飾品も考慮に入れることで、より総合的に《ポーズする女たち》を解釈した。

本発表では、まず作品の基本情報について述べ、先行研究が「現代性と古典性の対比」という結論への帰結を目的としすぎていることや、モデルの図像源泉について詳細な調査を行っていないこと等、問題の所在を確認する。

次にモデルについて検討し、中央のモデルの図像源泉は通説だったウェヌス・プディカではなく逡巡のポーズだという解釈を打ち出す。さらにその体型について習作をもとに考察する。従来の解釈では、モデルの体が貧相なのは彼女たちが疲れ切った労働階級であるためとされ、それゆえこの絵はブルジョワ社会を非難していると思われていた。しかし研究者は、モデルの体つきがふくよかでないのは習作段階でのモデルが少女だったためと解釈した。同時に、そのような身体表現は伝統的な絵画では一般的でないことから、本作におけるヌードモデルはアカデミックな主題を暗示的にしか表現していないことを指摘する。また、スーラの他のヌードを考察し、スーラの女性ヌードへの特殊な態度についても言及する。

最後に、画中画と《ポーズする女たち》の服飾品は、共通点もあるが、意図的に違いを与えられている点を指摘したい。さらに服飾品は画中画と対応させる目的の他に、モデルの三人のつながりを強調する意味があったと解釈する。このことから、《ポーズする女たち》と画中画の関係は曖昧なものにとどまっていると考えられる。加えて習作には服飾品が少数しか描かれていないことから、当初のこの絵の第一の目的はヌードを描くことであり、娼婦との対比等、具体的な構想は発想段階にはなかったと推測する。

以上から、《グランド・ジャット島の日曜日の午後》と《ポーズする女たち》の関係は暗示的なものにとどまり、現代的な主題と古典的な主題の対立や、モデルが実は娼婦であるといったはっきりとした解釈はそぐわないものだと結論付ける。